

多文化接触のメディア空間

—米国のコミュニティラジオから

西川 麦子

ふとしたきっかけで自分が居る場所や日々の暮らしのなかの「当たり前」を見直すことがある。文化人類学者は、わざわざ異なる場所から場所へと移動する。その社会に余所者として身をおき、「私」が何者なのかしばしば説明を求められ、身体的に受け入れられない感覚や、頭のなかで整理できない違和感にいらだちながら、考える。他者との出会いをとおして自分というものに少し気づく。

私も、場所をかえ、さまざまなテーマの研究を行ってきた。日本での「近代産婆」研究、パングレラデシユ農村での物乞研究、ロンドンの地域コミュニティ研究、などである。そして、二〇一〇年九月から、アメリカ中西部にあるイリノイ大学に研究員として所属し、アーバナ・シャンペーンに一年間滞在する機会をえた。これまでロンドンで取材してきた、一九六〇年代の住民運動やカウンターカルチャーの活動が、同時代のアメリカの

グラスルーツの運動とどのように連鎖していたのかを研究する予定であった。ところが、ひょんなことから、小さな街のコミュニティラジオ局で日本語番組を始めることになった。

*

アーバナ・シャンペーン両市の人口は合わせて一二万あまり、大学を中心とした地方都市である。周囲には、トウモロコシと大豆の畑が広がる。私は、アーバナ市のダウンタウンに住んでいた。近所にメディア&アート・センターがあった。一九一〇年代の建造物らしい重厚な外装とポップカルチャー的な内装に惹かれ、そこでの活動を見学するようになった。このセンターの中に、ラジオ局 WREU-FM、通称ラジオ・フリー・アーバナがある。一〇〇ワットの低出力ラジオ局で、半径一〇キロメートルほどに電波が届き、アーバナ・シャンペーンの住民の大部分が、このラジオ局からの放送を受信することができる。

ラジオ局のスタジオは、センターの関係者と地域の人々が自分たちで作ったものだそうだ。六畳ほどの小さな部屋に、机が二つ、L字型に並び、パソコンとミキサーとCDのデッキが置かれている。マイクは二本、立派なスタンドもなく、机につけたアーム（ネジが緩くなっている）にマイクをワイヤーで括りつけている。機材担当者が机の内側に座ると、他の参加者は、肩をすり合わせるように、机の周囲、機材の裏側に座る。パーソナリティが、資料を置くスペースさえもない。なのに、なぜか、二人掛け用のソファが壁際に置かれている。

「世界一小さなスタジオだね、キュートだ」。一九六〇年代のロンドンで、アンダーグラウンドなメディア、文化活動を次々と仕掛けてきたX氏はスタジオの映像を送ったら、そんな感想が返ってきた。X氏は、私に、以前、英国の海賊ラジオの話をしてくれたこともある。X氏曰く、「マスメディアは一つの情報をできるだけ多くの人々に伝える。コミュニティ・メディアは、たとえ一人に対してでも情報を届けようとする」。私は、英国の六〇年代の活動家たちの話に触発されて、米国でのメディア実践に入り込んでしまったようだ。

ラジオ・フリー・アーバナも隠れ家的な発信基地ではあるが、非合法のラジオ局ではない。アメリカでは、半世紀にわたる長い市民運動の結果、二〇〇〇年に非営利メディアとして低出力ラジオ局が認められ、二〇〇一年から申請手続きが始まった。二〇一三年現在、八〇〇を超す小さなラジオ局がある。これまで

では郡部のみの認可であったが、二〇一三年一〇月からは都市圏での開局申請が始まる予定である。全米で数千の地域限定ラジオ局が誕生し、数年後には、ハイパーローカルでニッチなメディアとしてトレンドイイな話題となっている、かもしれない。実は、そんな背景などつゆ知らず、それでも、アメリカのコミュニティラジオって何だろう？と好奇心を抑え難く、ラジオ局での集会に出席してみた。そこで、「あなたも番組を担当できます、日本語でもいいですよ」と声をかけられ、おおいに戸惑った。アーバナ・シャンペーンの日本人は、センサスでは四〇〇人未満である。日本人コミュニティがあるわけでもない。いったい誰に向けて、コミュニティラジオ局から日本語番組を放送するというのか。

では、日本人だけでなく、日本語学習者や日本文化に関心がある人、日本滞在経験者なども参加できるラジオ番組を作ってみようか。しかし、アーバナ・シャンペーンでは新参者の私には、ラジオ番組を一緒に作りませんか、と呼びかける仲間はいない。じゃあ、いつそのことを海を越えて、日本とつないでトークをしてみよう。

*

こうして、二〇一一年四月から、ラジオ局のスタジオと日本をつなぐ生放送のトーク番組が始まった。アーバナのスタジオに現地からのゲストを招くだけでなく日本在住者とも話す。仕組みは単純である。スタジオと日本の出演者のパソコンをイン

ターネットをつなぎ、スカイプ（インターネット・ビデオ通話サービス）を利用して話す。スタジオの声はマイクから、外部からのスカイプの声はパソコンを通してスタジオのミキサーに入力される。その音声は、建物内のトランスミッターへ送られ、周波数が調整され、送信アンテナから地域に発信される。放送後は、録音を編集して、番組のウェブサイトにポッドキャストとして音声と説明文を添えてアップロードする。サイトには、世界のどこからでもアクセスすることができる。

番組を、Harukana Showと名づけた。Harukaは、「遙か」と、「春香」の掛詞である。ちなみにベンガル語のハルカは、軽いという意味だ。アーバナ・シャンベーンを基点として、そこから、いろいろなバウンダリーを軽やかに越えて、遙か離れた場所と人と情報をつなぎ、その土地の季節の香りや人々の暮らしや、出演者の人生のある場面を伝えていく。もし、そんなコミュニティラジオ番組が本場に可能なら、その地域ではマイノリティの立場にある人も、諸事情によって外出が難しい人も、社会と関わるツールとしてラジオを利用することができる。試してみよう。

ラジオ局のメンバーが、機材担当を申し出てくれた。日本からの二人の協力者をえた。放送は、現地時間では、毎週金曜日夜六時から七時、日本時間では、土曜日の朝九時から一〇時、サマータイム期間は一時間早くなる。アーバナ・シャンベーン在住の番組スタッフは、最初は、私と機材担当者の二人だった

者に語ろうとする時、意識が少し変わる。都内世田谷区の住民が、近郊農家の新鮮野菜をコインロッカーから購入すると話す。東日本大震災一年後の三月一日に、神戸で津波到達予想ライオンを歩くというイベント、新年の神社での巫女のアルバイト体験、といった内容を、海外へどう伝えるのか。

栗原奈名子監督の「A Grandpa from Brazil」(ブラジルから来たおじいちゃん) (二〇〇八) がアーバナ・シャンベーンで上映された。日本とブラジルのあいだの移民をテーマに扱ったドキュメンタリー映画である。会場からこんな発言があった。「日本では、学校教育のなかで、海外から移ってきた子供たちへの日本語教育はどのように行われているのか」。ハルカナショーのイベント情報では、そんな話題をとりあげる。アメリカでは、英語ネイティブでない生徒にたいする第二言語としての英語教育が充実している。日本では、「国語」教育制度に、日本語を母語としない生徒への言語指導を正規に組み込むことは難しい。アメリカをとおして日本社会を見直すことになる。

ハルカナショーは異なる文化だけでなく、異世代の感性が交差する。話し始めたら止まらないと遠慮しながら、AKB48を大好きなイリノイ大学の韓国人留学生が、日本語でアイドル論を話す。Ozonoの抽象的な歌詞を気に入っている学生もいる。ナルトやムラカミハルキから、日本に関心をもったという話がよく聞く。日本からの出演者が、アニメの「聖地巡礼」について語ってくれたこともある。若い世代とのトークをとおして、

が、五ヶ月後には、日本人スタッフが二人増え、地域情報が充実した。私は、二〇一一年九月に日本へ戻り、その後も、毎週、自宅がある京都から番組制作を担当している。

二〇一三年二月二日、ハルカナショーは一〇〇回を迎えた。この間、アーバナ・シャンベーン、シカゴ、京都、神戸、東京などから、五〇名ちかくのゲストが番組に参加した。米国からは、在米日本人、日系アメリカ人、日本語学習中のイリノイ大生、学生、教職員、日本文化研究者、NPO職員、メディア&アート・センターの関係者、日本での英語教師経験者、訪米中の学生、僧侶、弁護士、図書館司書など、日本からは、大学教職員、学生、小学校の日本語補助教員、コミュニティラジオ関係者、商店主、映画監督、ミュージシャンなどである。

ラジオ・フリー・アーバナの他の番組は、「移民」「環境と食」「ネイティブ・アメリカン」「スポーツと政治」「技術のシェア」「宗教と音楽」など、テーマがはっきりしている。ハルカナショーには、特定のテーマはない。その日の出演者が、自由に話題を持ち込み、日本語、もしくは英語で話す。学び始めて二年目の日本語や、関西弁だったりする。米国、日本からの参加者は、言葉、季節、暮らし、社会の状況を、必ずしも共有していない。トークのなかでも無数の「ずれ」や「重なり」が立ち現れる。

日本からの出演者は、身近なことを「彼の地」の見えない他

それぞれが夢中になっている、日本文化を知る。

*

ハルカナショーのメディア空間には、三つの場が交錯する。第一に、地域の人々が気楽に立ち寄りやすいコミュニティラジオ局のスタジオという物理的空間である。こぢんまりとした部屋で、ゲストは緊張しながらもくつろいで会話を楽しむ。しかし、「これは、生放送だ」と我にかえる。スタジオからの音声は、電波をとおして地域に発信される。話者の意識のどこかにリスナーが存在する。第二は、出演者やリスナー（ビクター）が暮らすそれぞれの地域である。ラジオやポッドキャストの声は、誰がどこから出演しているのか区別がつかないが、実際には地球の裏側のさまざまな場所をつないでトークが進行している。第三に、各人が思い描く「アメリカ」や「日本」というイメージ空間である。自分の声が、遙か離れた土地の人々に届くところまで想像しながら話し、聴いている。

こうした空間が絡み合ったパブリックな場への発話は、個人的体験や出来事を見えない他者への意識された物語へと組み替える。ハルカナショーでの会話は、発話主体としての私や自分が居る場所を認識するというプロセスではないかと思う。

ところで、あなたもアメリカのコミュニティラジオで話してみませんか。「えっ?」と想った瞬間に、何かを意識し始めている。ハルカナショーの世界へようこそ。 <http://harukanashow.org/>

(にしがわ むぎこ) 甲南大学 文化人類学